

## せいきょう連ニュース

岡山県生活協同組合連合会 TEL : 086-230-1315 HP : <http://okayama.kenren-coop.jp/>

## 岡山県生協連「第60回通常総会」を開催しました。

6月25日(火)10時からオルガホールにて、第60回通常総会を開催しました。倉敷医療生協の和泉かよ子理事が司会となり、三井造船生協より長谷井泰久代議員が議長に選任され議事を進行しました。総会運営委員として、倉敷医療生協の遠矢敏勝代議員、三井造船生協の阿部十嗣男代議員、理事会から阿部孝司理事が選任されました。



近藤清志生協連会長より、西日本豪雨災害での各生協の様々な支援活動や暮らしを取り巻く課題、SDGsと生協の取り組み、県生協連60周年とこれまでの活動の軌跡などにふれて挨拶がありました。

来賓挨拶として、岡山県県民生活部暮らし安全安心課 今岡永倫子総括参事より、知事の祝辞として、県生協連設立以来、地域社会に根ざした様々な活動の展開によって県民生活の安定と生活文化の向上に貢献していることへの感謝や、昨年、ヘルスチャレンジの取り組みがおかやま健康づくりアワード2018で表彰されたこと、また、豪雨災害での被災者支援や募金へのお礼、消費者が安全な商品やサービスを安心して消費でき、自ら考え行動する自立した消費者であることが必要なことから、県も消費者団体と連携して各施策に取り組んでいくなどの挨拶を頂きました。

日本生活協同組合連合会中四国地連 大同久人事務局長より、西日本豪雨災害での多面的な各生協の支援により、行政や社協、NPOなどと新しいつながりを深めたことが、今後の防災、減災、復興支援につながっていくこと、世界で起きている様々な地球と人類が悲鳴を上げている状況の中でその課題を解決するのがSDGsであること、2030年に向けた全国の生協のビジョンのメインテーマが「つながる力で未来をつくる」であることなどにふれて挨拶を頂きました。



県生協連 近藤会長

暮らし安全安心課  
今岡総括参事日本生協連中四国地連  
大同事務局長

柿誠司事務局長より第1号議案から第5号議案まで一括して提案され、会場から4名の代議員からの発言が行われ、議案討議を行いました。

## ごあいさつ

岡山県生活協同組合連合会 会長理事 近藤 清志

会員生協の皆さまには、日頃から県生協連に対しましてのご支援、活動への参加を賜り、厚くお礼申し上げます。県生協連の総会も終了し、新しい体制での活動がスタートしました。

昨年の西日本豪雨から1年が経過致しました。多くの尊い命が奪われ、建物だけでも1万6000棟もの被害を受けるなど大変甚大な被害となりました。改めて被災された皆様にお見舞い申し上げます。

会員生協の皆さまは、発災直後から支援物資の提供やボランティアの参加、炊き出し、健康相談、職員、医師、看護師の派遣など様々な支援を行なわれていますこと、心より敬意を表します。

仮設住宅では、7200人余りの方が生活されており、生活再建にむけては、まだまだこれからとなります。引き続き支援をお願い致します。

今年度は、県生協連として設立60周年を迎える年となります。行政や他団体との連携、地域社会づくりについて、県生協連としての役割が担えるよう取り組みを進めていきたいと思っております。今年度も宜しくお願い致します。

# 会場発言で、各会員生協から、取り組みが報告されました。

## 倉敷医療生協 片山 聖さん



「西日本豪雨災害での取り組み」について、豪雨災害で被災した真備歯科診療所の再建までの報告、真備地域での避難所訪問などの活動内容や3か月間で3198世帯を訪問したこと、全国からたくさんの医師支援があったこと、地域で炊き出しや茶話会など様々な支援活動を行ったことなどについて報告がありました。



片山代議員

## おかやまコープ 萩原 美江さん



「中山間地域での課題解決の取り組み」について、県内すべての自治体と協定を結び地域の課題解決を進めていること、その中で、県北の新庄村の道の駅でコープコーナーを開設しての連携、美作市の食の自立支援事業協力として「たべてん便」お届けの連携、津山市の「買い物サロン」モデル事業での連携について報告がありました。



萩原代議員

## 津山医療生協 藤本 一予さん



「津山医療生協の健康づくりの取り組み」として、班会での健康づくりの取り組みや保健大学を開催していること、ヘルスチャレンジの取り組みで年々参加者数が増加していることや参加者へ記念品とともに報告書を配布していること、健康集会として、テーマを決めて講演会を行っていることなどについて報告がありました。



藤本代議員

## 三井造船生協 宮川 和弘さん



「葬祭事業の報告」について、葬祭事業立ち上げの経緯や現在の設備の内容、直営で運営し、24時間365日受付対応していること、組合員ならだれでも加入できる葬祭専用の登録制度を運用していることや相談会を毎月開催していること、葬祭事業全体の施行状況などについて報告がありました。



宮川代議員

総会運営委員長の阿部孝司理事から、出席状況について、実出席37名、書面出席9名、委任1名、合計47名（100%）であることが報告され、続いて採決を行い、全議案を可決しました。最後に今総会での退任理事2名と新任理事1名が紹介され、総会を終了しました。

- 第1号議案 2018年度事業報告書および決算関係書類承認の件
- 第2号議案 2019年度事業計画および予算決定の件
- 第3号議案 定款の一部変更の件
- 第4号議案 役員選任の件
- 第5号議案 役員報酬決定の件

## 全議案が承認・決定されました。



## 岡山県共催 2019年度「消費者月間講演会」を開催しました。

6月1日(土)14時30分よりオルガホールにて、岡山県消団連と消費者ネットおかやまの主催、岡山県との共催で、「消費者月間講演会」が開催され、72名が参加しました。

消費者ネットおかやまの河田英正理事長の講師の紹介を兼ねた開会挨拶の後、岡山県消費生活センター上野所長の報告では、平成30年度の相談件数は8,419件で70歳以上の相談が一番多くなっていること、商品・サービス別相談件数では、架空請求と放送・コンテンツ等情報通信関係の相談が多く、全体の3割以上を占めていること、また、昨年発生した西日本豪雨災害に関係する相談として、高額な修理工事の契約など106件が寄せられたことなどの報告がありました。



県消費生活センター  
上野所長

次に「高齢者の消費者被害と改正消費者契約法」と題して、全国ジャパンライフ被害対策弁護団連絡会団長で弁護士の石戸谷豊先生から講演をして頂きました。まず、相次ぐ高齢者の大型集団被害として、最近問題となったジャパンライフとケフィアの2つの事件を紹介しながら、共通して「元本保証」で有利に見えることでまされてしまい大きな被害につながったことなど、「元本保証」のリスクについて強調されました。次に高齢社会と消費者契約法というテーマで、広い意味からすると、消費者契約法は21世紀の超高齢社会のインフラ整備と位置づけられることやそもそも高齢化について正しく認識すること、認知症と意思決定の関係などについて

説明がありました。続いて、消費者契約法の改正の経緯や2016年と2018年に改正された部分について、つけ込み型類型や取消・無効の範囲が拡大した内容について詳しく説明がありました。また、現在、消費者庁に「消費者契約法改正に向けた専門的技術的側面の研究会」を設置し、さらなる消費者の利益を守るための検討を進めていることの紹介があり講演を締めくくりました。少し難しい表現や説明もありましたが、改正された消費者契約法について我々消費者自身が理解を深め、学ぶ機会となりました。



消費者ネットおかやま  
河田理事長



石戸谷豊弁護士

### (寄せられた感想より)

- 時代の流れに沿って必要であることの着目点や研究テーマに大変興味を持ちました。法改正に向けた取り組みの流れを知る機会がなかなかないので、面白かった。
- 消費者被害と今後の消費者契約法の改正方向も参考になりました。
- 超高齢社会に見合った法律が整備されるように望みます。先生の話はとてもわかりやすく、また、情熱が伝わってきました。
- ふつうに暮らしている消費者がちゃんと守られるよう一つひとつの法律が整備されてほしい。
- 法律の成立に関わられている先生の話はとても興味深いものだった。
- 法律を改正する時の業者関係者とのせめぎ合いを感じることができました。



## 岡山県主催「消費者被害撲滅キャンペーン」に参加しました。

5月19日(日)13時からシティライトスタジアムにて、岡山県主催の消費者被害撲滅キャンペーンが開催されました。当日は、「消費者被害撲滅デー」として、消費者ネットおかやまと岡山県消団連から4名が参加しました。

岡山県の職員とともに、ファジアーノ岡山公式戦の入場者らに、消費者被害のことや消費生活センターのことなどを尋ねるアンケートを実施して、グッズ(ファジアーノコットンバッグ)を配布するなど、消費者被害撲滅をアピールしました。また、ファジアーノ岡山の選手による啓発CMやモデルの近藤千尋さんによる競技場での消費者ホットライン188のPRなどを行い、若者を中心とした多くの県民に普及啓発を行いました。



—復興を担う女性たち—

## 「南三陸町の漁業者の思い、町の魅力を伝えたい」

### たみこの海パック

「津波を目の当たりにして、もう養殖はやれないと思った」と阿部民子さんは言います。しかし家業である漁業から離れるわけにはいきません。「だったら私は自分にできることで自分の居場所をつくろう」。そう考えて阿部さんは2012年10月、南三陸町の特産物詰合せを販売する「たみこの海パック」を立ち上げました。

「南三陸の海産物をお土産に買って帰りたい」というボランティアの声をヒントに、複数の水産加工場から商品を仕入れ、独自の詰合せセットを考案。ホームページ「たみこの海パック」を開設し、オンラインストアで通信販売を始めました。

さらに女性が短時間でもイキイキと働ける場所をつくりたいと願い、子育て中の女性を一人雇いました。女性は海藻類の袋詰めを、阿部さんは販売に奔走しました。「ボランティアさんに直接、買ってくださーいとお願ひし、近くの道の駅やスーパーに扱ってほしいと頼みに行きました」。

販路が広がるにつれて売上も増え、翌年秋には黒字を計上できるようになりました。「震災をきっかけに事業を始めた私の生き方を理解し、応援してくれている人たちがたみこの海パックを育ててくれました。人に恵まれたと思います」。

阿部さんには「たみこの海パック」を通じて南三陸町の漁業者の取り組みや町の魅力を伝えていきたいという思いがあります。

そのため商品に浜の様子や復興の歩みを伝える「たみこの四季だより」を同封したり、ワークショップで来町した人たちに南三陸町の漁業の特徴などを描いた紙芝居を披露したりしています。

「震災直後、漁業者は収入減を覚悟の上でカキの養殖いかだを3分の1以下に減らし、環境に配慮した養殖に切り替えました。みんな不安と葛藤のなかでスタートしたのです」。おかげで日本で初めて国際認証ASCを取得できたこと、栄養が行き届いてより美味しいカキが獲れるようになったこと、海藻は漁業権を持った、主に女性たちが岩場を歩いて採っていることなど。

「売りたい伝えたい相手は県外・関東の人たち」と阿部さんは言います。それは大きな消費地に住む人たちにこそ生産地である南三陸町の特産物を味わってほしいから、町に足を運んでほしいからだ。

「課題は“伝えること”ですね。インスタやフェイスブックなどSNSを使って発信を続けていきます」と笑顔を見せます。



方言やレシピを載せた「たみこの四季だより」、養殖体験ツアー、ワークショップなどを通じて南三陸町を「伝えて」います。

—まち・住まい・コミュニティー—

## 「多様なチャンネルを活用して、居場所を見つけられる街に」

### 宮城県東松島市野蒜まちづくり協議会

野蒜駅の改札を出ると、広場の向こうに野蒜ヶ丘の新しい街並みが広がっています。

津波で甚大な被害をうけた東松島市野蒜地区では、多くの世帯が近くの山林を開いて造った高台へ集団移転しました。2017年10月にはまちびらさが行なわれています。

野蒜まちづくり協議会（以下まち協）は、住民参加のまちづくりを目指し、野蒜ヶ丘の3自治会や東名・大塚など旧市街地の5自治会と協力しながら、様々な事業に取り組んでいます。

移転にあたって課題になったのがコミュニティ形成でした。まち協会長の菅原節郎さんは、「野蒜ヶ丘は震災前のコミュニティを活かす形で移転したことや何度も話し合いを重ねたことで、“この街でこの人たちと暮らしていくんだ”という気持ちが醸成された。移転後も自治会ごとにイベントを開催し、それがコミュニティの活性化に役立っている」と話します。

最近では野蒜ヶ丘の分譲地を買って移り住む若い世帯も増えてきました。一方、災害公営住宅や旧市街地を中心に高齢化も進んでいます。

まち協副会長の山縣嘉恵さんは「自治会のイベントに参加できない人もいる。そうした人々を含め、住民の地域での居場所づくりがまち協の役目になる」と言います。

同じくまち協副会長の佐賀剛さんも「地域全体のあり方を考え、若い世代が住みやすい街づくりや人材育成が大切になってくる」とこれらを見ずえします。

まち協では、昨年度開催した地域づくり勉強会や若い母親のためのママカフェを、今後も行う予定です。

「ママカフェは市民センターの交流スペースを活用し、お母さんたちが子どもを遊ばせながらお茶を飲んだり、保健師さんや保育士さんに子育てについて相談したりする場」と山縣さん。地域づくり勉強会も「野蒜の街を知り、地域を担っていく人材を育てていくためのもの。今後も外部から講師を呼ぶなどして学ぶ機会をつくりたい」（佐賀さん）と積極的です。

菅原さんは「すべての住民が自分の役割や出番があるような街にしたい」との思いを抱いています。「そのためには人と人のつながりが数多くあった方がいい。自治会ごとの交流だけでなく、ママカフェや勉強会、趣味のグループなど様々なチャンネルを活用して、自分の居場所を見つけてほしい」。

もともと住民同士の付き合いが活発だった野蒜地区には、コミュニティの芯となる助け合いの習慣が今も根付いています。

まち協の住民参加のまちづくりは、そうした故郷の財産を活かしながら、今後も進められていきます。



震災後、高台に移設された JR 仙石線野蒜駅。広場のすぐ先に観光物産交流センターや市民センターがあります。